第 11 回　連続講座・日韓の「歴史問題」の論点を探る（2022 年 12 月 16 日）

記憶戦争から記憶の連帯へ

東アジア記憶空間と犠牲者意識ナショナリズム

林志弦　韓国・西江大学校　教授

なぜ「記憶」を問題とするのか：ナショナル・ヒストリーを超えるために

林志弦です。まず招待してくださった東京大学韓国学研究センターに感謝いたします。今回は、専門の歴史というよりも、ある公共領域で共に悩み、東アジアを人々がもっと住みやすい場所にするためにご苦労されているみなさまと問題意識を分かち合う場になれば、とても嬉しいと思います。 今日私が準備したタイトルは「記憶戦争から記憶の連帯へ――東アジア記憶空間と犠牲者意識民族主義」というものです。はじめに、私がなぜ記憶という問題、メモリースタディというものに関心を持ったのかについてご説明します。

まず 1999 年、その少し前から日本の何人かの知り合いと「批判と連帯のための東アジア歴史フォーラム」という日韓の知識人の集まりを作って活動したことがあります。その頃は、日本で歴史修正主義者が現れはじめた時期で、その観点から編纂された『新しい歴史教科書』が出てきて検定が始まり、あるいは『国民の歴史』が出版されるといった時代でした。東アジアは少し物騒な雰囲気の時代だったように思います。そうした中で、私たちは互いに批判と応答を行うことを通じて、このフォーラムを始めました。韓国と日本の批判的知識界のなかでは、韓国が日本の植民地だったという理由で日本のナショナル・ヒストリーを一方的に批判し、韓国のナショナリズムを正当化するような傾向がありました。そして既存の日韓の連帯方式が、両者の誠意にもかかわらず、結果的には互いの民族主義的な敵対心の強化に寄与してしまう結果になっていたという認識がありました。これらについての批判的な意識があったことが、そのフォーラムを立ち上げた一番大きな理由でした。

その際に、私たちは共同の歴史教科書をつくることを目的としたわけではありません。単一の共同教科書を作るよりも、ナショナルヒストリーのパラダイムを批判する方がもっと基本に

据えるべきだと思いました。ナショナルヒストリーに対する批判的認識体系を共有すれば、歴史解釈の差異も敵対的でない方式で共存できるというのが私たちの考えでした。「一つの歴史」というものはあり得ません。さまざまな解釈の違いを排除してしまう「教科書」というもの自体、非常に問題がありますし、日韓を貫通した単一な歴史教科書をつくるということは、学問的、もしくは実践的に無理があります。

そして国家の境界を超えて、ナショナル・ヒストリー＝「国史」というものを超えて、辺境の歴史（ボーダーヒストリー）、つまり国家の境界の外に立ち、互いに矛盾するような東アジアの歴史を見れば、歴史的解釈がそれぞれ違うとしても、その差異というのは敵対的差異ではなく非敵対的な差異であって、それぞれを共存させることは可能なのではないか、そういった意識が芽生えてきました。そして相互の批判と連帯を通じて、ナショナル・ヒストリーの枠組みについての問題を提起し、それを超越するような、そういう客観的な立場に立てないかということを構想したのです。「国史」を超えること、「ナショナル・ヒストリー」を超えること、それが我々の挑戦したことでした。

地理的身体（GEOBODY）＝地図戦争（MAPFARE）

それは大きな反響を呼びました。新聞の社説などにも載り、多くの方々から力を得たこともありました。しかしあらためてよく考えてみると、人々が歴史漫画や映画、ドラマ、そして最近では youtube などの SNS を通じて歴史を学んでいる事実があると悟るようになりました。ドラマなどを見ると、最初に「ここで扱っている歴史は必ずしも事実ではない」「事実に基づいて作られた」などといった字幕が出てきます。多くの人が持っている過去のイメージというのは、そうしたドラマや SNS、youtube などで学んだ歴史の知識が占めているのではないでしょうか。漫画などはビジュアルなイメージにとても大きな力があるため、人びとに強い刺激をもたらします。

タイの歴史家、トンチャイ・ウィニッチャクン（Thongchai Winichakul）が提示した概念で、地理的身体（geobody）というものがあります。たとえば、独島・竹島問題を見るとわかりやすいのですが、そこは韓国の土地ではない、日本の土地ではないといった領有の問題を、あたかも自分の身体が傷つけられたかのように錯覚してしまうといったことです。 今の日本や韓国、中国もそうですが、隣国から来た移住民の存在を消してしまったり、互いに与えた歴史的影響そのものを否認しようとさえします。そして違う国の歴史と関係があった場合には、まるで自分の体の一部が削り取られるような、そういう意識を持ってしまうのです。つまり、地

理的な身体（geobody）を持って戦争（mapfare） するわけです。たとえば、二つの国の間で領有が争点になっている土地があったとして、その土地が相手側の領土に属していたことを歴史的に示すような地図が発見された場合には、それに対して激しく憤激し、否定する、といった反応が生じることになります。

「国民」としてのアイデンティティを作り出すもの

近代国民国家ができる以前は、人々の住居地は点と点で繋がっていました。その境界は領域的なものです。今の観点から見ると、昔から国家同士が接する境界は「線」で区切られていたかのように錯覚してしまうのですが、そうした錯覚に対する批判的な歴史認識を持とうとするよりは、大衆的なドラマなどといった媒体の影響のもとで、過去に対するステレオタイプなイメージを作るのに人々が没頭しているという側面があります。

博物館でも同じです。私は 10 年ほど前の日本滞在時に、奈良で行われた「皇室と正倉院宝物展」に行きましたが、その宝物展を見て、仏教関連の日本の国宝リストを探したことがあります。そこで非常に面白かったことは、日本の国宝には輸入品が多いということに気がついたことです。リストを見ると、約 50%は外国からの輸入品でした。日本では、「国宝」、つまりナショナル・トレジャーについては、それがたとえ輸入品であったしても原産地を明記しているのです。しかし韓国でいわゆる「国宝」というべきものについて話す際には、どれが輸入品だったかということはあまり考えません。そのため、それらをすべてメイドインコリア、韓国産だと錯覚してしまいます。しかし「国宝」というものは、それを分類する過程で人々のナショナリズムを非常に強く刺激する面があるものですから、そこには大きな疑問を感じざるを得ません。

人口に関しても同様です。日本も韓国も、厳密には単一民族というものではなく、知らないうちに多様な民族が混ざりあっているはずです。しかし、「あなたの人種は何ですか？」と誰かに質問をする場合、そうした質問をすること自体が、ある意味で自分と相手のアイデンティティを認識し、確認しようとすることにつながります。

1931 年にポーランドで実施された国勢調査の質問は、とても巧みに設計されていたようです。あなたが何人であるかということに関して、ウクライナ人か、ポーランド人か、ユダヤ人か、ドイツ人かといったことではなく、「ここに住むひと」ということで回答可能だったのです。多くの人にとっては地域的なアイデンティティがより重要な意味を持つということを示す、非常に興味深い国勢調査です。

こうしたことを見ると、地図や博物館、人口調査などといったものが、現在の「国民」としてのアイデンティティを作り出していることがわかります。そして、それが自分自身のアイデンティティを独占的に支配しているのです。ですが本来は、「国家」というものを超えて、地図や博物館、人口調査などの「国民」を作り出すための装置を超えて、人々の生活が深く根ざしている「地域」というものが、人びとのアイデンティティにとってより大きな役割を果たしていることに気づくべきだと思います。

「記憶」をめぐる葛藤

「歴史」の理解というものは論理的なものです。それに対して「記憶」は、人々の気持ちにより強く働きかけ、それを動かします。したがって、その社会的影響力は歴史よりも記憶の方が大きなものになりがちです。東アジアで今起きているさまざまな問題に対しては、現在のナショナリズムを前提とした歴史記述、つまりナショナル・ヒストリーを超えて、過去に対する共通の歴史の理解を作り上げることが一つの解決策になるのではないかと考えています。

2000 年頃から続いている「記憶」の問題は、現在の東アジア、日韓だけでなく中国も含めてですが、それぞれの市民社会に深く根付いている草の根、民間レベルで密接に繋がっています。記憶をめぐるこのような葛藤状況を東アジアが乗り越えるためには、ナショナリズムと結びついた記憶の体制（Memory Regime）を改める必要があるでしょう。

たとえば、「韓国は日本の植民地主義の犠牲になった」ということや、「日本は世界唯一の原子爆弾の被害国である」といった、その国の人びとの心に深く根付いた「記憶」が過ちだと言われると、人びとは自分の主体がぐらつくような危機感を感じてしまいます。「歴史」というものは本来複雑な背景を持つものなのですが、そうした複雑さが人びとに不安感をもたらすのです。日本人の場合ならば、「世界唯一の被爆国としての日本人」、すなわち西洋帝国主義の最大の犠牲者というものが、実はそうではない面もあるのではないか、などという疑問を提示されると、生存論的（ontological）な危機感を覚えてしまうことになります。その危機感は増幅されて、歴史認識といった学問的な次元や、外交といった国家次元の葛藤ではなく、市民社会の次元に表れてくることになるのです。

このような記憶の葛藤という問題について、互いに自分たちの「記憶」を真っ向からぶつけ合わせているだけでは解決は難しいでしょう。そうではなくて、互いに異なる記憶の交差を通じて、互いに交渉して、譲歩し合う、共感し合うという実践が必要だと思います。そして、こ

うした記憶の葛藤の問題は、程度の差こそあれ、東アジアだけの問題ではなく世界的な問題です。

たとえば、10 月にワルシャワで行われた記憶に関する国際的な大会では、「記憶の支配」という話題が話し合われました。ポーランドやハンガリーで、ユダヤ人の虐殺、ホロコーストについて、民族の名誉を毀損するような発言をした場合には処罰を加える、そうした記憶方法が登場していることについてです。これは新しい「記憶の支配」、あるいは「記憶法を通じた支配」（mnemocracy） というべきものです。同様のものが世界各国であふれ出しています。この背景にはグローバリゼーションの進展があると考えますが、グローバリゼーションが先鋭化している東ヨーロッパと東アジアで特に顕著です。私は、それに対する解決方法とまでは言えなくとも、その問題を少しでも解くための方法の一つが、Global Easts、すなわち東アジアと東ヨーロッパに根付いている「犠牲者意識ナショナリズム」を批判することだと考えています。それが東アジアや東ヨーロッパで現在生まれている記憶をめぐる葛藤を解消していくための一つの出発点となるのではないでしょうか。

「トランス太平洋記憶空間」の生成

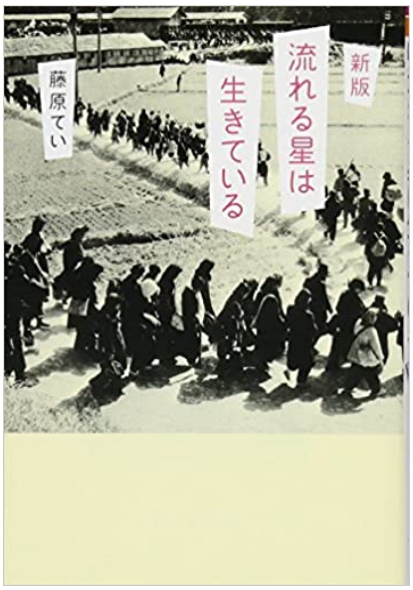
【画像 A-1】はヨーコ・カワシマ・ワトキンズの『竹林はるか遠く』という本です。朝鮮半島から引き揚げる際に日本人が味わった苦痛や苦労を題材としたもので、韓国では 2005 年に翻訳されました**【画像 A-2】**。

【画像 A-1】

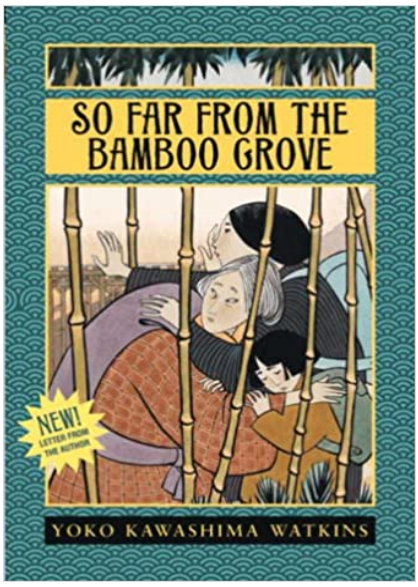
【画像 A-2】

最初の翻訳の時には、韓国でも淡々とした、好意的な書評によって受け入れられていたのですが、2007 年に突然韓国のマスコミから批判的な声があがったのです。この『竹林はるか遠く』は日本では比較的最近になって出版されたものですが、同じように引き揚げ者を主題とした作品としては藤原ていの『流れる星は生きている』**【画像 A-3】**という作品があります。こちらの方がはるかに歴史のある本です。ただ最近の amazon レビューを見ると、藤原ていの作品よりも『竹林はるか遠く』の書評の方がずいぶんと高い点数になっています。

【画像 A-3】本の内容から見れば、両者の水準は比較できないほど違います。しかし、『竹林はるか遠く』が韓国社会で批判的に取り上げられたことで、かえって日本社会で注目され、話題になってしまったのです。



【画像 A-3】



【画像 A-4】

現在、東アジアにおける国境を越えて作動する超国家的現象、すなわち東アジアだけでなく太平洋を超えて米国まで含めて作動する一つのあり方として「遠距離ナショナリズム」というべきものがあるのですが、ここではそれの非常に面白い側面を見ることができます。この本の内容は、幼い少女が引き揚げの際にさまざまな苦労を体験しながらも、後に立派な女性に成長したというだけのことでしかありません。これは韓国でもはじめはそのまま受け入れられた話でもあったのです。しかし突然 2007 年になって、「日本が歴史を歪曲している」という批判の的になりました。そこでは日本の引き揚げ者の苦痛というものを完全に否定して、「そんな

ことはなかった」としてしまうような動きがありました。私が思うに、引揚者という表現自体がすでに、朝鮮半島や満州などから帰還する日本居留民の植民地主義をめぐる連累問題を脱歴史化してしまう問題があるんですけれども……。

ただ、そもそもこうした動きは韓国で始まったものではありません。2006 年頃にこの本がアメリカの学校の読書目録に挙げられたことをきっかけとして、ボストンやニューヨークの韓国系の人びとの間で問題になっていったようです**【画像 A-4】**。

韓国系アメリカ人がこの本に対して抗議を行ったのはなぜでしょうか。まず、アメリカの多くの人びとは、日本が韓国を植民地化して支配していたという東アジアの歴史的知識を持ちあわせていません。そのため、日本人の引き揚げた時の苦労話に触れると、「韓国人が日本人をいじめた」ものとして受け止めてしまうのです。そうして、むしろ日本の植民者たちの方が「犠牲者」として扱われ、学校で韓国系の子どもたちが非難されたり、いじめられたりすることがありました。このようなことが起きたために抗議が行われたのです。これは記憶をめぐる問題が単に地域の問題であるだけではなく、世界的な、グローバルな問題になってしまった事例であり、地域とグローバルとが結びついていることを示す事例だと言えます。

藤原ていの『流れる星は生きている』という本は、戦後の韓国のベストセラーで 50 位に入ったこともあります。引き揚げ者の苦労について、韓国社会はとりたてて敵対していなかった歴史が現実としてあるわけです。ところが 2007 年に突然、敵対しているかのような雰囲気が生まれてきました。それはアメリカにいる韓国系アメリカ人の問題提起が太平洋を超えて韓国に逆輸入されてきたからなのです。そして韓国で起こったヨーコ・カワシマ・ワトキンズに対する批判が再び日本に逆輸入されて、日本の知識人や文化人の間でこの本が大きな問題になり、日本語に翻訳されることにもなりました。Amazon ジャパンでは購入者のレビューを見ることができますが、私はそこでこの本を買った人たち、そしてそれに関連して「嫌韓本」を買った人たちについて、興味深くうかがうことができました。

さて、ここで起きていたことは一体どういうことなのでしょうか。それはつまり、アメリカの学校がヨーコ・カワシマ・ワトキンズの本を導入したことに対して、韓国系アメリカ人のコミュニティで行われた問題提起が、太平洋を越えて東アジアに戻ってきて、韓国と日本の葛藤の問題に拡大化し、植民地時代の幼い少女の一つの記憶が環太平洋的な葛藤をもたらしてしまった、ということなのです。太平洋を横断する記憶の量産と言うことができるでしょう。

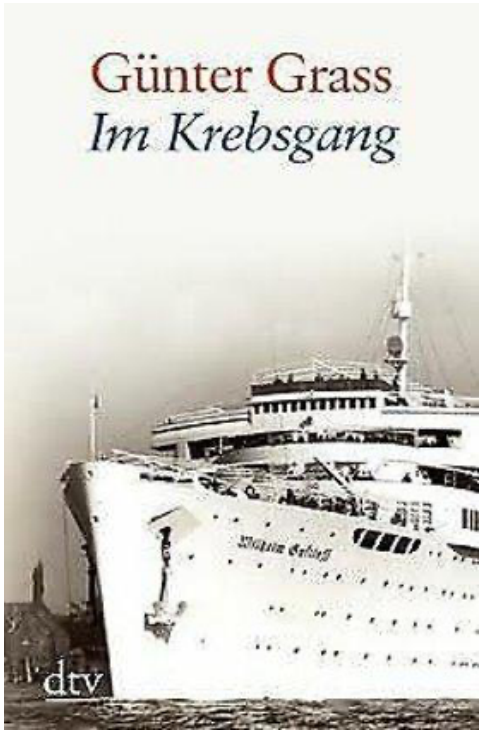
事実、これが一つの出発点だったのです。実際に論争を見てみると、実証主義を振りかざしながら、嘘だ、小説を書いている、歴史を歪曲している、という批判が一番多いようです。ですが私が見る限り、ヨーコ・カワシマ・ワトキンズの経験、つまり引き揚げ者の困難や苦難というものは、決して間違いでもウソでもありません。ヨーコ・カワシマ・ワトキンズの問題は、なぜ自分が清津（チョンジン）の先に、朝鮮半島の一番北にある羅南（ラナン）にいたのか、なぜそこに住んでいたのかということと関係があります。朝鮮は日本の植民地だった、その人の家族は帝国主義の本国から北朝鮮に向かったのだ、ということがいくらかでも示されていれば、東アジアの歴史について無知なアメリカの読者たちも異なる受け取り方をしたはずでしょう。ですが、作品の中ではそのような歴史的文脈はほぼ脱落してしまっています。もちろん小さな女の子の立場からすると、そのように見えたとも言えるのですが。そうして東アジアの歴史を知らない人々、たとえばアメリカの子どもたちがこの体験についての記述に触れた時、韓国系アメリカ人は悪い加害者だとしていじめが起きる、そのような様相が現れたのだということです。

歴史的脈絡のもとで問われる「責任」

【画像 B】は、 ギュンター・グラスによって書かれた原題は『Im Krebsgang』（日本語翻訳では『蟹の横歩き ヴィルヘルム・グストロフ号事件』 ）という本の表紙です。ヴィルヘルム・グストロフ号というドイツの旅客船の写真が用いられています。この旅客船は、1945 年、東プロイセンからドイツに帰ろうとするドイツ系の人びと、避難民、傷病兵などを乗せて航行中に、ソ連軍の潜水艦による攻撃を受けて沈没しました。

東プロイセンのドイツ系住民たちの移動の苦労は、冷戦期、多くの西ドイツの右派だけが取り上げて、東ドイツの共産党や西ドイツのリベラルや左派の人たちは無視しています。しかし歴史的文脈を認めて、それを批判的に受け入れていくような視角も必要です。

ギュンター・グラスはノーベル文学賞を受賞した作家の大江健三郎にも親しく、ドイツの文壇では比較的左派に属すると言われています。彼はこの作品において、この海難事件の歴史的な脈絡を非常に細密に点検しています。まず船名にもなっているヴィルヘルム・グストロフ（Wilhelm Gustloff）という人物についてですが、この人はスイスに駐在していたナチの指導者であり、スイス支部長だった人です。彼は 1936 年にユダヤ系クロアチア人の医学生ダヴィッド・フランクフルターによって銃撃され、殺されました。



【画像 B】

彼ははじめてユダヤ人に暗殺されたナチ党の指導的人物であったため、その名がさまざまなプロパガンダに利用されていくことになります。この旅客船はもともとナチの歓喜力行団が所有していたものでしたが、この船に彼の名が付けられたのもそうしたプロパガンダの一環です。スペイン内戦においては、ゲルニカへの爆撃を行ったナチの コンドル軍団がスペインからドイツに帰還する際にこの船を使用しています。いわば「血に染まった船」なのです。後には軍に徴用されて病院船に改装され、スカンジナビア半島を中心に傷病兵の移送にも使われたようです。

この小説では、現在もネオナチの影響力が強い旧東ドイツのメクレンブルクという地域を舞台の中心にして話が展開していきます。東プロイセンのドイツ系住民たちの間ではナチを支持する傾向が強かった人たちが多く、この小説の主人公もそうなのですが、そこには非常に多様な見方が出てこざるを得ません。この船に乗った民間人たちは、無辜な犠牲者でありながら、同時に単純に無辜の犠牲者だけだとも言えないのです。作中ではナチの犯罪行為に連累していたとも暗示されています。彼らも被害を受けた犠牲者であることは事実なのですが、「無辜」だと簡単に書くのではなく、歴史的な脈絡のなかで、彼らに歴史的責任があるかどうかが問われていくことになります。

1200 万人のドイツの避難民、320 万人の民間の引き揚げ者、そのような数字に対して私は批判的な人間なのですが、それでも引用するとしたら、この 1200 万人とか 320 万人という数字を無視することはできません。ドイツの引き揚げ者は避難の過程で多く見積もって 200 万人以上が犠牲になったと言われています。日本の場合、私が見た統計では満州からの引き揚げの際に 10 万人、あるいは 8 万人が犠牲になったとされています。規模だけを見たらドイツ避難民の犠牲者の方が多いのですが、ここでは数字の大小を問題にしたいのではありません。犠牲があったということは事実だとしても、しかし、ではなぜそのようなことが起きたのか、その歴史的な脈絡を見落としてはいけないということです。それが重要なことだと考えます。

脱歴史化／過剰歴史化

「犠牲者意識民族主義」が作動するには、「脱歴史化」、そして「過剰歴史化」という二つのパラダイムが作動しています。

たとえばドイツの場合は、戦争で捕虜になった人たちの間で起きた「戦友を虐待した者」（Kameradenschinder）の問題があげられます。ソ連の捕虜になったドイツの軍人たちの間では元 SS 隊員だった人をスターリンの秘密警察に密告し、密告を受けた人たちが処刑されるといったことがしばしば起こりました。そして解放された捕虜たちがドイツに戻った後で、収容所で自分の戦友を裏切った人たちへの裁判が行われたのです。驚くべきことに、戦友を裏切った人たちへの量刑の方がナチの戦犯よりも長いというのが、ドイツの 1950 年代の状況です。

日本の場合はシベリアの抑留者が例としてあげられます。たとえば米原万里が 1990 年代にこのような話をしています。ソ連の捕虜となったシベリア抑留者たちとソビエトの退役軍人たちとの歓談会を同時通訳した際、日本の抑留者たちが戦友の死や苦痛について訴え、ある人たちは泣き出しさえして、会場が騒然とした雰囲気になってしまったそうです。それに対してソ連側の人たちはまずは謝り続けたのですが、しかしある人が「ではあなた達はどうして満州にいたのだ」と逆に問いかけたら、一瞬にして静かになったというのです。これはとても象徴的な事例です。抑留者たちがソ連の捕虜収容所で犠牲になったのは事実です。しかし彼らが満州に駐屯していたこと自体は、日本の帝国主義、アジア太平洋戦争の加害行為に携わっていたことを示す事実でもあります。つまり被害者であり、同時に加害者でもあるということです。戦争捕虜の代わりに、抑留者という表現を使うこと自体が、すでに歴史的脈絡を消してしまうという感じも拭えません。

ヴィシーフランス、バルト三国やウクライナ、そしてイギリスのチャンネル諸島などでも同様の例があります。たとえばチャンネル諸島の事例についてご紹介しましょう。チャンネル諸島は英国海峡にあるイギリス王室の属領です。イギリス本国はナチスに占領されなかったため、イギリスはナチスに対して最後まで戦い自由世界を守ったということになっていますが、フランスに近いこのチャンネル諸島はナチによる占領を受けました。そしてこの島の小さなコミュニティの中では、ユダヤ人を探し出して密告するということも行われ、その密告を受けた人たちが強制収容所に移送されたという話も出てきます。もしそういう状況であったなら、つまりナチスがイギリス本土を占領したなら、どのような状況になったか想像できるというものです。

脱脈絡化が主に枢軸国の加害者から見られるならば、過剰脈絡化は被害者民族からよく見られます。例を挙げると、1941 年 7 月、ポーランドのイェドヴァブネという町で、800 人から 1200 人のユダヤ人が無惨に虐殺された事件がありました。1948 年、49 年に一応裁判も行われていますが、これは 2000 年まではナチスが虐殺したのだと言われてきました。しかし 2000 年代に発刊された本によって、ポーランドの住民たちが虐殺を行ったことが明らかになりました。アンナ・ビコントという記者が事件の犯人であるラウダンスキ兄弟をインタビューした時には、この人たちがユダヤ人を殺したのにもかかわらず、ポーランドの権威主義政権、ソ連軍の占領、ナチスの占領、ナチスの次は再びスターリン主義、そして共産主義などを列挙して、自分たちポーランド民族がすべてそうだったかのように長い間苦痛を強いられてきたのだと話したのです。つまりユダヤ人を殺した犯罪者たちが、自分の加害の行為については考えることなく、ポーランド民族＝犠牲者という図式を立てて自分を犠牲者としてのみ考えているということです。自分たちは犠牲者であり、被害者であると思い込む「過剰歴史」にとらわれているのです。

朝鮮人の場合であれば、日本軍の捕虜収容所の軍務員として服務し、戦後の戦犯裁判で戦犯として処刑された人々や懲役に処された人々がいるのですが、彼らを「犠牲者」であるとする考え方です。ここではやはり自分が行った行為への責任を持つべきであるのに、朝鮮が日本の植民地にされたのだから、民族全体が犠牲者であったのだから、彼らもまた犠牲者であった、そのような考え方になっていきます。これには問題があると思います。

再び、日本の場合を考えてみます。たとえば広島・長崎の被害、これはもちろん言うまでもなくひどいことです。日本はたしかに唯一の戦争被爆国なのです。連合国の無差別爆撃が民間人を標的としたものであり、これは日本だけでなく、ドイツの場合では特にドレスデン爆撃がよく知られていますが、日本やドイツの人びとが連合軍による無差別爆撃を受けたという事実は、誰もこれを否定することはできません。しかし、ではどのような文脈における広島や長崎なのでしょうか。そしてその犠牲者たちは、どのような方法でその戦争に携わっていたのでしょうか。それについて細密にアプローチする時、その時にこそはじめて、私たちはこの犠牲に共感することができるのであり、21 世紀の東アジアがこれから正しく発展するためには彼らの犠牲をどのように記憶すべきなのか、何が正しいのか、そのような議論が可能になるのだと思います。

記憶のグローバル化と国民化

実は、このような「脱歴史化」、「過剰歴史化」を見れば、ハンナ・アーレントが批判したように、集合的有罪（ Collective guilt ）という単純化された二分法が我々の思考方式を支配していることがわかります。

では、今のような敏感な葛藤が存在する現代の観点から、解放後の韓国の歴史を見てみましょう。まず、日本の総理大臣の靖国参拝について初めて批判記事が出たのは、1978 年でした。東亜日報の 3 面に福田総理が靖国参拝を行ったことが報道されましたが、同日の 1 面には対日貿易赤字をなくすための議論が掲載されていました。つまり福田総理の靖国参拝よりも、こうした経済問題の方が重んじられていたわけです。1980 年にも鈴木総理の参拝に関する記事が東亜日報にありましたが、これも穏健な批判を行うにとどまっています。このように、この時期には日本の総理大臣たちの靖国参拝をあまり重要視していなかったことがわかります。

ですが、これが 82 年になると、中曽根首相の靖国参拝、次に「日の丸」と「君が代」を日本の公式行事で導入してもよいとの決定、日本の防衛費の GNP1%突破、こうした諸々の事件が絡み合いながら、突然、東アジアで過去に対する緊張が爆発することになります。もちろんこれは不快なことです。

しかし、あえて楽観的に考えるなら――私が楽観的に考えているのかどうかはわかりませんが――、むしろこれは良い兆しであるとも言えるわけです。なぜなら、82 年にこれらの問題が東アジアで爆発する以前の沈黙というものは、関係がよかったことの結果ではありません。そうではなくて、隣国でどのような歴史教科書を使い、教育しているのか、隣国が第二次世界大戦やアジア太平洋戦争をどのように記憶しているのかについて、さして関心がなかったということでしかなかったのです。そして 82 年にそれが爆発したのは、東アジアが互いに結びつき、一つの記憶空間としての東アジアが登場する時点がそこだったからなのだと、私は思います。

たとえば 1955 年から 56 年に、すでに日本のいわゆる「赤い教科書」に対する検閲が現れており、「侵略」という語が「進出」に変えられました。これは 82 年度に初めて変えられたのではありません。55 年、56 年から「赤い教科書」に対する批判とともに、「侵略」が「進出」に変えられていたのです。南京虐殺に対する記述も削除されています。太平洋戦争についても、日本がアジア諸民族を西欧の植民主義から独立させる機会を提供した戦争であるとし

て、正当化するような記述の教科書がその頃からすでに出てきていた、そのような内容の研究を読んだことがあります。

つまり、82 年に教科書が格別に悪くなったということではないのです。教科書は以前のまま存在してきたのですが、アジアの隣国の人々が日本ではどのような教科書を使っているのかをあらためて問題視するようになったということなのです。これは問題を潜在化させるよりも、表出化させる一つの契機となりました。特に 1970 年代、日本で家永三郎教科書裁判を通じて、これらの問題が徐々に事実として知られるようになり、東アジアにおける昨今の問題を生み出した起爆剤になったと考えられるわけです。

あらためて整理すると、1980 年代に日本の教科書が変わったのではなく、日本の教科書に対するアジアの人びとの感受性が鋭敏になったということです。感受性が鋭敏になったということ自体、東アジア記憶空間が形成されてきたことの証拠であり、それによって「私の国の歴史教科書に対して干渉するな、それは内政干渉だ」という主張もあまり説得力を持たなくなっていきます。こうした感受性の鋭敏化こそが、東アジアという記憶構成体を作り出すきっかけになったのです。

もちろん、まだ楽観的に見ることはできません。それは明らかです。理性的には今もなお悲観主義的な見方が強いのですが、それでもあえて楽観主義的な視点から見ると、いずれにしても沈黙よりも問題提起された方がよい、というのが私の極めて素朴な考えです。

グローバル化する記憶空間：いくつかの事例から

しかし実のところ、日本と東アジアの記憶空間が突然グローバル化したというわけではありません。すでに 60 年代から興味深い側面がうかがえます。**【画像 C1〜C5】**は、ワルシャワにある現代美術博物館で私たちが見つけた資料で、1963 年 1 月 27 日のアウシュヴィッツ解放記念日に、日本の広島から平和運動家ら 4 人が参加した時の写真です。

これをポーランドでは「広島オシフィエンチム平和行進」（日本では「広島・アウシュヴィッツ平和行進」）と名付けています。日本の僧が反核平和運動家たちとともに行進し、広島からシンガポール、インド、ハンガリーを経て、63 年の 1 月にオシフィエンチムに到着しました。その当時はまだアメリカ全体の大学でホロコーストに関する講義が一つしかないような時代でしたから、その頃にアウシュヴィッツを訪問したこと自体は、とても先駆的なことだったと言えます。

【画像 C-1】

【画像 C-2】

【画像 C-3】

【画像 C-4】

【画像 C-5】

この催しはポーランドの国会議員が提言したものでした。「PAX」という極右的なカトリックの国粋主義的組織で、ポーランドの共産党が意図的にこの組織を成長させ、国会にも議席を持っていました。「西側が核戦争を起こそうとしている」という東西冷戦を前提としたコンテキストがあり、それを非難するという意図のもとで広島の平和運動家たちが招かれたということです。**【画像 C-6】**は、アウシュヴィッツに隣接するポーランド南部で最大の都市で発刊された日刊紙で、この件が記事になっています。日本の犠牲者たち、特に原爆の犠牲者たちがアウシュヴィッツのホロコーストの記憶と出会い、犠牲者たちと出会うという過程は意味深いことだと言えるのですが、しかし脈絡は複雑です。

ホロコーストでのユダヤ人の犠牲と日本人の原爆の犠牲はともに、白人人種主義によるものだとし、原爆の犠牲を日本人のナショナリスト的な解釈で占有してしまう、ということにもなり得るのです。

ROK XIX
Nr 24 (5908)

DZIENNIK POLSKI

KRAKÓW
Wtorek 29 I 1963

Cena 50 gr

Pierwszy dzień wolności...

Takim dniem był dla nich — ok. 3 tys. szkieletów ludzkich, niedobitków hitlerowskiego barbarzyństwa — 28 stycznia 1945 r. Kilka godzin wcześniej bowiem — 18 lat temu — K. L. Auschwitz-Birkenau — największe pobojowisko w dziejach świata przestało istnieć. Szeroko jego bramy i drogę do wolności dla tych, którzy ocaleli spośród 4 mln ofiar tu zamordowanych otworzyli żołnierze Armii Radzieckiej.

I choć Oni byli już ludźmi wolnymi, w drodze znajdował się jeszcze ostatni, jaki zdążyli hitlerowcy ewakuować z Oświęcimia, transport więźniów. Trwali bez chwili wytchnienia kilka dni i nocy w nieustannym marszu. Przypomniał o tym przemawiając w niedzielę 27 bm. na uroczystościach 18 rocznicy wyzwolenia Oświęcimia wiceprzewodniczący Wojewódzkiego Komitetu FJN, sekretarz KW PZPR w Krakowie, Stanisław Pięta. Wskazał równocześnie, iż zgromadzeni są świadkami innego marszu — „marszu pokoju" Hiroszima — Oświęcim. Nie przypadkiem 4 japońskich jego uczestników znalazło się w tym dniu u mety swej wędrówki, która wiodła przez 23 kraje Azji i Europy na trasie o długości 53 tys. km. Oświęcim i Hiroszima stały się na całym świecie symbolem okrucieństwa i ludobójstwa, męczarni setek tysięcy niewinnych ludzi.

Nazwy obydwu tych miast złączyły się — jak nigdy dotychczas — jako symboi przestrogi i ostrzeżenia — w czasie niedzielnych uroczystości. Oświęcim reprezentowali Ci, którzy przeżyli jego piekło oraz więźniowie innych hitlerowskich kaźni. Nie zabrakło też wdów i sierot po zamordowanych. Hiroszimę — mękę 230 tys. ofiar wybuchu bomby atomowej przewodniczący grupy „marszu pokoju" mnich buddyjski ven Ehikshu Gyotsu Nichiko Sato wraz z 3 towarzy-

(Dokończenie na str. 2)

【画像 C-6】

次に、**【画像 D-1】**は、広島県福山市にあるホロコースト記念館で撮影したものです。アンネ・フランクの像の周りには、アンネの生家から移したバラの木が植えてあります。

そして**【画像 D-2】**は、安藤忠雄が作ったホテルのなかでももっとも豪華な淡路島のホテルのロビーを会場にして、アンネ・フランクのパネル展が開催された時のポスターです。ただ、これは少々コンテキストが合わないと思わざるを得ません。

【画像 D-1】

【画像 D-2】

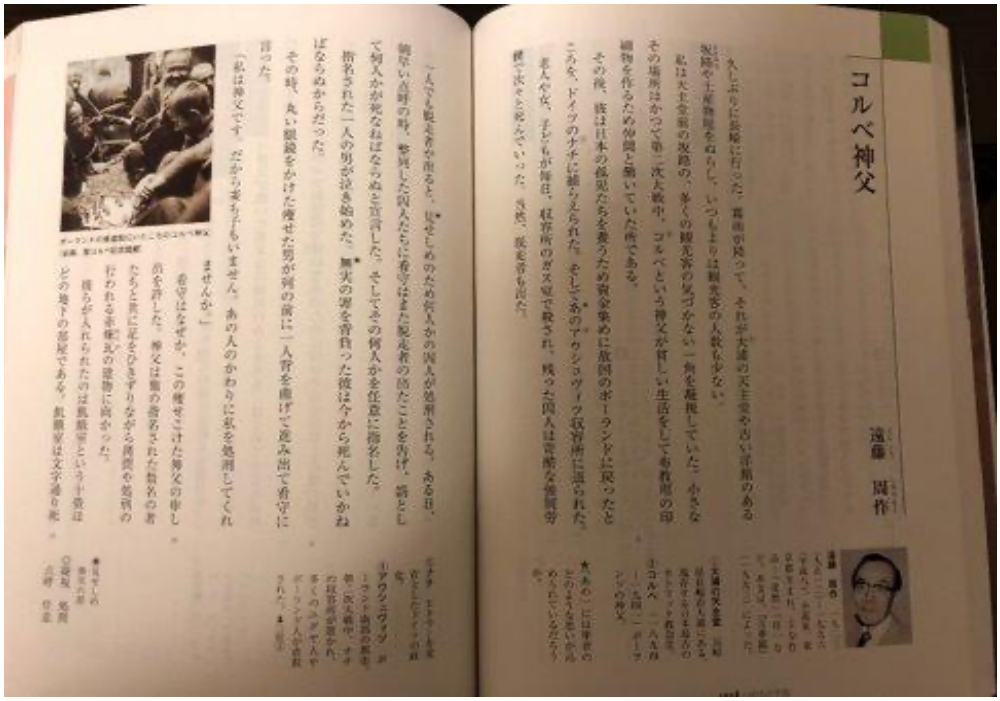
しかし、たとえばヴィクトール・フランクルの『夜と霧』は 1956 年に日本で翻訳されましたが、その中の訳者による序文を見ると、南京大虐殺に言及しながら、ナチスが行った犯罪の記憶を日本の植民地主義的な犯罪に対する批判的な省察へとつなげようとした文章がありました。また本多勝一はベトナム爆撃を目撃して、では私たちの日本軍はどうだったのかと問いかけ、南京大虐殺に至るまでに日本軍が行ってきた残虐な行為を追及していきました。そのような犠牲の記憶への連帯もあったのです。ホロコーストを自分たちの行ってきたことに対する省察や批判をうながすための記憶として受けとめた側面がある一方で、それを自分たちの歴史を正当化するツールとしても用いてしまう面もある、そこに葛藤や緊張感があるということです。

【画像 E-1】は、永井隆とコルベについてのものです。コルベは『無原罪の聖母の騎士』という雑誌を出版し、聖母の騎士修道院を創設して長崎で布教活動を行いました。1981 年には教皇ヨハネ・パウロ 2 世もコルベの創設した修道院を訪問しています。ここに示した『微笑の秘訣』というエッセイは、永井隆が 1933 年にコルベを診察するため修道院に行き、結核の診断を出した時のことを書いたものです。アウシュヴィッツで自らの命を犠牲にしたコルベの純潔

さ、そして原爆投下を通じて戦争を早く終わらせることで人類のために犠牲になった長崎、このようにして犠牲者への追悼を繋げたという脈絡をこのエッセイは示しています。

【画像 E-1】

【画像 E-2】は、遠藤周作の『コルベ神父』です。一方**【画像 E-3】**は、ポーランドのリベラルなカトリック系週刊誌『週刊普遍（Tygodnik Powszechny）』に掲載された、ポーランドの尊敬される左派知識人リップスキーの読者手紙です。そこには、1930 年代にコルベが出版した雑誌『Mały Dziennik』が反ユダヤ主義の温床であったことを指摘し、カトリック教会がコルベ神父を列福しようとする動きに対し批判する内容が書かれています。コルベが 1930 年代半ばにポーランドで出版した雑誌は、実はポーランドにおいても極端に反ユダヤ主義的な傾向を持っていました。驚かされるのは、遠藤周作はどちらかと言えば進歩的な、批判的な知識人グループに属していた人であったにもかかわらず、そのエッセイの中ではコルベの反ユダヤ主義的な側面は省略されてしまっており、コルベの純粋な側面だけが強調されているということです。これはポーランドの反ユダヤ人主義とどのように繋がるだろうかと考えさせられます。



コルベ神父

遠藤 周作

【画像 E-2】

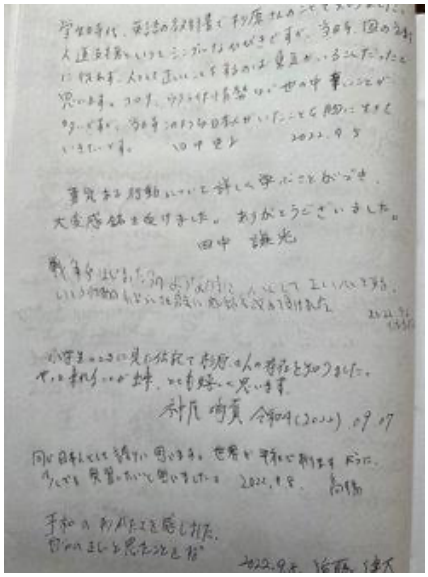
OJCIEC KOLBE I „MAŁY DZIENNIK"

【画像 E-3】

次に「グローバル・シンドラーズ 」（Global Schindlers）という概念について考えてみます。ユダヤ人を救った人たちへの記憶が強化される、ということについてです。

現在、私はワルシャワに住んでいるのですが、リトアニアのカナウスにある杉原記念館に出向いて、いくつかの写真**【画像 F-1～F-3】**を撮影してきました。

【画像 F-1】



【画像 F-2】

【画像 F-3】

多くの日本の方々が杉原の記念館を訪れ、訪問録を残していました。ユダヤ人たちにトランジットビザを提供して、彼らの命を救った杉原の行為に対し、官僚組織の命令に従わず、それ

を拒むことがとても重要なのだという感動的なコメントもありましたが、多くは日本人であることに誇りを持つ、杉原と同じ日本人であることに誇りを持つ、という内容のコメントとなっていました。

また、杉原は日本の英語教科書、歴史教科書、道徳教科書などにもよく登場してその業績が強調されるため、それをきっかけに杉原に興味を持つようになり、リトアニアに交換留学に来たという内容のコメントもありました。杉原記念館にはリトアニア人、ユダヤ人の事績を展示するホールもあります。このように、ここにはユダヤ人を救った人たちについての多くの温かい話がある一方で、それによって他の記憶が覆い隠されてしまうということもあり得ます。

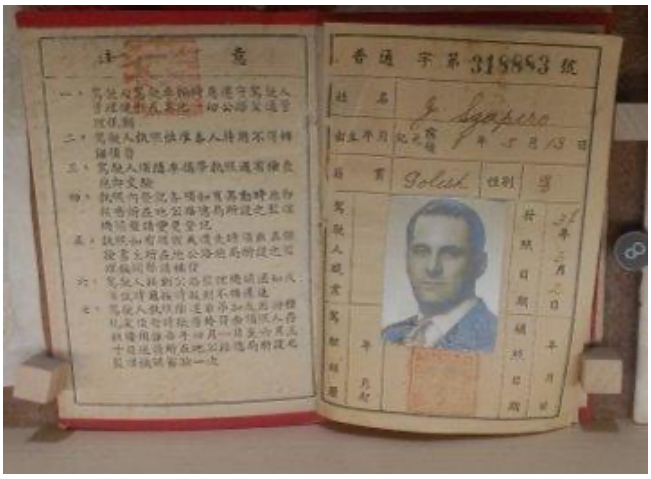
【画像 F-3】は、千羽鶴の写真です。日本に関連した博物館では、広島の被爆後遺症や白血病で亡くなった方のための折り鶴が必ずあるのですが、杉原記念館で広島の「貞子の折り鶴」が飾られているのは脈絡から外れているのではないかと思われます。現在（日本で）作られている杉原の記憶は、発展的な記憶を作り上げるうえでは少し障害物になるのかもしれません。

【画像 F-4】は、杉原に献呈されたコンサートが開催された時の写真です。『光の勇気』と名付けられた新作のシンフォニーが演奏され、杉原に捧げられました。興味深いのは、この演奏会ではまずイスラエル大使、そして日本の大使も発言をしています。

【画像 F-4】

また、日本の杉原のみならず、中国でも何鳳山**【画像 G-1】**というチャイニーズ・シンドラーが作り出されました。**【画像 G-2】**は、その当時のビザです。**【画像 G-3】**は中国上海にある、当時ユダヤ人ゲットーとして使用された建物、そして**【画像 G-4】**は「上海ユダヤ難民祈念館」です。こうした諸々のものが「シンドラー」を作り上げています。

【画像 G-1】



【画像 G-2】

【画像 G-3】

【画像 G-4】

次はポーランドについてです。ポーランドでは反ユダヤ主義や対ナチ協力者の話も多くあるのですが、今の右翼政権は、ユダヤ人を救ったポーランド人の事績を紹介する博物館**【画像 H-1～H-4】**を作りました。

【画像 H-1】】

【画像 H-2】

【画像 H-3】

【画像 H-4】

ユダヤ人家族を匿ったために虐殺された、そのような人たちの事績がここでは強調されて展示されています。しかしここであらためて私が言いたいことは、アジア太平洋戦争の頃の日本人の中で、朝鮮人や中国人を救うために自分のことを犠牲にした日本人はいなかったのか、ということなのです。私は多かったと思います。どうして東アジアの記憶文化は、当時日本帝国に抵抗して中国人や朝鮮人、あるいは誰であったとしても、日本帝国の暴力による犠牲者を救い出そうと自分のことを犠牲にした人のことを強調しないのでしょうか。日本の社会は、なぜユダヤ人を救った人にだけフォーカスを当てるのでしょうか。これはやはり、今日の世界にお

いて「ホロコースト」というものが、グローバルな記憶にとって極めて重要な役割を果たしていることと関係があります。つまり、ホロコーストからユダヤ人を救った人のグループの中に日本人を入れることで日本の「国格」を高められる、そのように考えた結果なのです。中国の習近平政権にも同様の傾向はあります。東アジアで隣国の民を救おうとして犠牲になった日本人を追悼することは、なぜあまり行われないのでしょうか。しかしそのような記憶が繰り返し言及されることで、東アジアの記憶文化も非敵対的な形に発展することができるのではないかと思います。

【画像 I-1】は日本軍慰安婦に関する写真です。ニューヨークのホロコーストセンターで、アメリカに移民してきたホロコーストのサバイバーたちと、韓国の元慰安婦被害者たちが会って話し合っている時のものです。

【画像 I-1】

【画像 I-2】

【画像 I-2】は、グレンデールというロサンジェルスに隣接した小さな都市で撮影したものです。この街では毎年、ギャラリーで日本軍慰安婦に関する展示を行っています。

なぜグレンデールなのかということについて説明すると、このグレンデールという都市はアルメニア系の人びとが多く、そのコミュニティも強固で、市議会にもアルメニア系の人が多いのですが、アルメニアの人びとは過去にジェノサイドを受けた経験を有していることもあって、国際的な人権問題への連帯に強い関心を持っているからなのです。そして一つ面白いことは、グレンデールにいるアルメニア系アメリカ人だけではなく、日系アメリカ人の団体であるNCRR（Nikkei for Civil Rights and Redress）、つまりルーズベルトの行政命令によって家と財産を残して強制収容所に連れて行かれた日系アメリカ人への謝罪を要求し、その賠償を実現するために活動した日系アメリカ人の団体が、この催しに一緒に参加して、日本軍慰安婦の展示を作り上げているということです。ここには日本軍慰安婦像を変えるという連帯の姿がハッキリと見えています。

【画像 I-3】は、サンフランシスコのチャイナタウンにある少女像で、これは中国系アメリカ人たちがお金を出しあって作ったものです。慰安婦の中国の少女、韓国の少女、フィリピンの少女たちが互いに手と手を取り合っています。その少女達を、韓国人元慰安婦の金学順ハルモニがうかがっています。これは私の大好きな少女像の一つです。

【画像 I-3】

【画像 I-4〜I-5】は、日本の新宿区早稲田にある「女たちの戦争と平和資料館」で撮影した写真です。こちらでは、日本軍によるものだけではなく、今も全世界的に繰り返されている戦時性暴力、戦場における無辜の女性たちの犠牲についての展示が行われています。日本軍慰安婦はそのうちの一つで、それはただ日本と韓国の間の問題というだけではなく、全世界的な女性の権利の問題であるということ、そして戦時性暴力は女性に対する男性の犯罪なのだということを悟らせてくれるという意味で、高く評価できる重要なテーマを提供しています。

【画像 I-4】

【画像 I-5】

次はとても典型的な、それこそコメディのような話です。私の友人はメモリアルアーキビストとして活動しているのですが、私に次のようなメールを送ってきました。「あなたたち、本当に変わっているよね、ヴィーゼントって地名を聞いたことはある？」というので、私は「いや、聞いたことない」と答えたのですが、その人も聞いたことのない地名なのだそうです。その人によると、人口約 2,000 人のヴィーゼントという街に、ある日突然韓国から数十名の記者たちが押しよせてきて、少女像を建て、そのことが小さな田舎町の新聞で記事になったので、それを見てメールを送ってきたのだということでした。私もその記事を探してみましたが、もし実際にこれが

韓国で起きていたら、大事になっていただろうと思いました。日本の庭園のような場所の横に少女像を立てて、イベントを行ったということなのです**【画像 J-1～J-3】**。

【画像 J-1】

【画像 J-2】

【画像 J-3】

調べると、韓国の某市の市長が地方選挙の前に自身の政治的業績を作ることを目的に、資金を出したのだそうです。約 8000 万ウォン（約 800 万円）だと言われています。そして日本軍慰安婦や女性ジャーナリストを呼び、写真を撮影したのですが、これは韓国国内の選挙のための「ショー」としての側面が強かったようです。民族主義的に問題を展開してしまうことは、決して望ましいことではなく、むしろ最悪の方法ではないでしょうか。

ホロコーストの歴史が我々に与える大きな教訓は、我々は二度と犠牲者になってはいけないということだけではなく、平凡な人間である我々は、なんらかの特定の条件さえ与えられれば、容易にホロコーストの加害者になってしまう可能性があるのだということです。それがもっとも大きな歴史的教訓であると思います。多くのドイツ人が、自分の隣にいた人たちと暖かい視線を送りあっていたはずです。しかしナチが政権を取ると、それに対して誰もマイノリティへの迫害の動きに抵抗することができませんでしたし、問題提起をすることさえもできませんでした。そして逆にホロコーストを手伝い、共犯者になってしまった隣人たちがいたわけです。

我々も日本の植民地になったことについて、全員が犠牲者であったという「犠牲者意識ナショナリズム」を超えていかなければ、「加害と被害の共有」ということは理解できないのではないでしょうか。犠牲者意識民族主義を批判することは、決して単純なことではありません。非常に複雑な脈絡を伴うことです。そして、我々も犠牲者だったという思いは、直線的で、単純で、非常に強く感情に働きかけるものであるため、人びとを感情的にさせやすいものなのです。ですから、この問題を解消するのは決して簡単なことではありません。

次の**【画像 K-1～K3】**は、シンティ・ロマの犠牲者に対する研究者であるリバプール大学のイヴ・ローゼンハフト(Eve Rosenhaft)と、西江大学の Critical Global Studies Institute が一緒に展示を行った時のものです。このようなビジュアル的な展示も重要ではないかと思います。

【画像 k-1】

【画像 k-2】

【画像 k-3】

互いの歴史の差異を認めながらも、それを共有していこうと努力することが大切です。東アジアで苦痛を味わった他者の痛みに互いに共感すること、そしてそれを癒しながら、近代文明に対する批判的な記憶を語り継いでいくこと、そうした努力を通じて、さまざまな葛藤に対する処方的な接近方法が見いだせないだろうか、そのようなことを悩みながら考えつづけているところです。ありがとうございました。

Jie-Hyun Lim（林志弦）

韓国・西江大学教授、同大学トランスナショナル人文学研究所長。1959 年ソウル生まれ。1989 年西江大学博士(西洋史学)。韓国・漢陽大学教授、同大学比較歴史文化研究所長などを経て 2015 年から現職。専門は、ポーランド近現代史、トランスナショナル・ヒストリー。ワルシャワ大学、ハーバード燕京研究所、国際日本文化研究センター、一橋大学、ベルリン高等学術研究所、パリ第 2 大学、コロンビア大学などで在外研究と講義を重ね、各国の研究者と共にグローバル・ヒストリーという観点から自国中心の歴史を批判してきた。現在は、記憶の研究に重点を移し、東アジアの歴史和解を模索している。著書に、『犠牲者意識ナショナリズム――国境を超える「記憶」の戦争』澤田克己（翻訳）(東洋經濟新聞社, 2022), Global Easts: Remembering, Imagining, Mobilizing(Columbia University Press, 2022), 『기억전쟁: 가해자는 어떻게 희생자가 되었는가? Memory War: How have perpetrators become victims?』（서울: 휴머니스트, 2019)など。